

小学校低学年の部

特選 自由図書部門

むだづかいがくれるもの

大和小学校二年

細野 瑛菜

わたしはユーフォーキャッチャーがすき。かわいいぬいぐるみやおもちゃが入っていて、ほしくなる。とれないかもしれないけど、とれるかもしれないから、ちょうせんしたくなる。かぞくで買えるものに出かけると、ときどきみんなでやる。でも、やらない日もある。おかあさんは、あんまりむだづかいしたらだめだからと言う。そんなとき、わたしはつまらないなと思う。

この本は、聞吉くんのかぞくがしんはつめいのじどう買いのきで買えるものをする話。じどう買いのきは、そのいえるものもっているお金で買えて、ちょうど今いるものはなにか、かんがえてとどけてくれる。だから、まちがいがいいし、むだづかいもしないすこいきかいだ。でも、聞吉くんたちはなげかうれしくないし、つまらないと思ってる。

このあいだ、十円でちょうせんできるユーフォーキャッチャーを二十回やった。けどとれたおもちゃは一つだけ。おとうさんとおかあさんがしごとをしてかせいだお金だから、

たいせつにつかわないといけないのに、もったいないことをしたのかな。じどう買いのきだったら、ぜったいやらせてくれないと思う。これって、むだづかいかな。

だけど、かえるとき、わたしもおとうもおとうさんもおかあさんも、にこにこしていた。みんなたのしそうだった。

そっか、むだづかいはしたけど、かわりにたのしいきもちやくやしいきもち、みんなですごした思い出がもらえたんだ。わたしがとつたのは、おもちゃだけじゃなかったんだ。

たいせつなお金をなにつかうかみんながかんがえて、みんなでつかうなら、それはむだづかいじゃないんだと思う。聞吉くんがはつめいしたじどうむだづかいかいきみに、わたしもおこづかいをためて、かぞくでたのしいじかんをすごしたいな。

北川 幸比古 作

『しんはつめい じどうむだづかいかい』 岩崎書店

こうひょう

えなさんは、かぞくでユーフォーキャッチャーであそぶときのことを思い出して、お金のつかい方についてかんがえることができましたね。むだづかいのように思うことも、なににつかうかみんながかんがえてみんなですごすならそれはむだづかいかいでないことに気づくことができます。すばらしいです。

小学校低学年の部

特選 課題図書部門

けんかのたねってなんだろう

大野小学校一年 田中 あやめ

この本のひょうしには、おこっている人やわらっているようにみえる人がかいてあります。犬やねこもいて、みんながわになってつながっています。このえをみたときに、わたしは「けんかではなく、ほんとうはたのしいおはなしなのかな」とおもったので、この「けんかのたね」をよんでみました。ところが、じっさいのおはなしは、四人きょうだいにどうぶつたちも入ったけんかのばめんからはじまります。お母さんも、だれをしかつていいのかわからないくらいです。しごとからかえつてくたくたのお父さんが「おいおい、いったいどうしたんだ？」と聞くと、どうやらすえっ子のミーナがねこの上にすわってしまったことがはじまりのようです。おどろいたねこがミーナをひっかいて、どんどんみんなをまきこんでいきます。

こうしてけんかは大きくなるのですが、そのはじまりになったミーナが、さいごはじぶんから「いちばんわるかったのは、あたしなの」といって、あやまったところをよんで、わ

たしは「ミーナってすごいな」とおもいました。もし、わたしがこのけんかの中にいたら、お父さんやお母さんにおこられたくないので、すぐにほんとうのことはいえないかもしれない。じぶんで「けんかのたね」をみつけて、わるかったところをはなせるミーナは、とてもかぞくおもいな子だとかんじました。

わたしはひとりっ子なので、きょうだいげんかをしたことがありません。ともだちとけんかをしたこともないので、どうしてけんかになるのがふしぎでしたが、けんかには「たね」があることがわかりました。わたしも、これからけんかをする必要があるかもしれない。そうなったときに、「わたしはどこがわるかったのかな」とかんがえて、「けんかのたね」をさがすことがたいせつだとおもいました。そして、それを見つけたら、ミーナのようにじぶんからしようじきにはなして、ちゃんとかなおりができるようになりたいです。

ラッセル・ホーベン 作 小宮 由 訳  
『けんかのたね』 岩波書店

こうひょう

「けんかのたね」になったのは自分だと思いを打ち明けた末っ子のミーナに共感したあやめさん。ミーナの言動から、正直に話す勇気を大切にして生活していこうと考えたあやめさんのまっすぐな人柄が伝わってくる作品です。

小学校低学年の部

特選 課題図書部門



「よるのあいだに…」を読んで気づいたまわりのささえ

大野町立南小学校二年 三間 匠馬

七月におとうとのそうちゃんが入いんした。その日のよるおそく、ぼくはびょういんに行った。しばらくの間、お母さんとそうちゃんに会えなくなるからだ。びょういんには、ひる間と同じくらいたくさんの人がいた。かんごしさんやおいしやさんはとてもいそがしそうだった。きゆうきゆう車がサイレンをならしながらきて、ぼくはふとこの本を思い出した。びょういんからかえると中、コンビニによった。コンビニではお店の人がパンをならべていた。本当だ！たくさんのおひとがよるの間もはたらいっている！そのおかげで、そうちゃんはびょう気になってもすぐみてもらえたし、ぼくはよ中でもおにぎりが買えた。車の中であつたおにぎりは、とてもおいしかった。

この本には、よるの間にはたらく人がたくさん出てくる。ぼくはお父さんとお母さんのことを考えてみた。ぼくのお父さんはやくざいしだ。当ばんの時はケータイをずっとはなさない。休みの日も、トイレに入っている間も、ねている時も、

でんわがなるとすぐにでる。そして、あつという間に

「ちよつと行つてくるね。」

と行つてしまう。ぼくはあそんでいる時にでんわがなると、またか、いやだなと思つていた。でも、つらい人をたすけるために、くすりをつくつてとどけていることを聞いた。いたくてねむれない人をたすけるために、よ中に出どうすることもある。ぼくはお父さんをすぐかっこいいと思うようになった。

お母さんは、ぼくがねてからアイロンをかけたたり、体そうふくに名前をぬいつけたりしてくれる。そしてあさおきると、いつも、ホカホカのあさごはんがじゅんびしてある。

この本を読んで、ぼくが気づかない間に、たくさんの人にたすけてもらっていることが分かった。お父さん、お母さん、ぼくをささえてくれるたくさんの人たち、いつもありがとう。ぼくも大きくなったら、まわりの人をささえられるかっこいいおとなになりたい。

ポリー・フェイバー 作 中井はるの 訳

『よるのあいだに…みんなをささえるはたらく人たち』

BL出版

こうひょう

自分が体験したことを本の内容とつなげながら、生き生きと表現することができました。今までは違う視点で家族や周りの人の姿を見て、自分が支えてもらっていることに対する感謝と支えてくださる人へのあこがれをもてたことが素晴らしいです。